

軍事機密の戦闘機工場で

寺坂和雄さん(新野東)

15歳で働きに出て

わたしは兵隊に行くまで、兵庫県にあった川西航空機で戦闘機「紫電」を製造していました。

昭和15年、当時の農村はどこも貧しく、わたしは15歳で働き出しました。その年、川西航空機には約2千人が採用されたそうです。当時はそれだけ軍需産業が盛んだったのです。

入社するとすぐ技術者の養成所に入れられ、数学や設計などの学科を習いながら仕事をしました。勉強しながらですからあまり給料はもらえません。寮費や食費などを天引きされたらわずかな額しか手元に残りません。15、16歳の子どもです。お菓子が食べたいのですぐに使ってしまい、随分とひもじい思いをしました。3年間の養成所が終わるとやっと一人前の給料がもらえるようになりホッとしました。

極秘の工場、過酷な労働

当時、工場では局地戦闘機の開発を進めていました。これは基地などの爆撃に備えて敵を迎撃するための戦闘機で、それが「紫電」でした。当時随分と開発が急がれていたようです。開発は軍事機密だったので試作機を造る工場の周

りは板塀で囲まれていました。工場にも専用の腕章をした人しか入れませんでした。

「1号機を一刻も早く完成するために突貫作業をやれ」と命令され、徹夜で作業をする日が続きました。最後の月には合計15日間も徹夜をしました。朝出勤して夜も働き、休まず翌日の夕方まで作業するので、今ではとても考えられません。当時はそれが当たり前でした。

昭和17年12月に1号機が飛び、さらに翌年8月には、姫路に毛織工場を改造した飛行機工場が作られ、量産体制に入りました。わたしはその工場で作業班の伍長(現場監督)として7、8人の作業員に指示を出すように言われました。当時わたしは18歳、作業員のほとんどが30、50代で年上の人です。設計図を見て指示を出すのにも苦労しました。

工場には女工さんや学徒動員の女学生さんも大勢来ていました。作業がつかなく、厳しいのでしょ、泣いている姿をよく目にしました。**徴兵年齢引き下がり兵隊へ**
徴兵適齢臨時特例で徴兵年齢が

原爆投下直後から救助へ

激しさを増す戦争

昭和17年に徴兵検査を受けたわたしに入隊命令が下りたのは、昭和18年2月9日、20歳の時でした。「翌10日に福岡に集合せよ」とだけ知らされ、その先どこに行くのかはまったく分かりません。1週間ほど福岡で訓練をした後、夜間に出発し、関門海峡を渡って、満州

北京を通り、南京の少し西にある瀘州の陸軍病院に衛生兵として配属されました。病院付きの衛生兵は、陸軍病院で教育を受け、病棟に勤務します。医師の助手を務める看護師のような仕事ですが、外科手術なども経験しました。

昭和20年6月10日「本土防衛のため」として帰還命令が下りました。そのころの戦局は大変厳しくなっており、朝鮮半島最北の港で

1週間ほど船が来るのを待ちました。もう10日ほど遅かったらソ連へ連れ



▲上海の第一陸軍病院で衛生下士官の教育を受けたところ

木本 十郎さん(加茂町桑原)

て行かれたことでしょうか。船は朝鮮半島に沿って南下し、萩の港へ到着。次の配属地である広島に着いたのは6月27日でした。

広島で配属された砲部隊は戦地向け資材の船舶補給部隊でしたが、一部はいわゆる「人間魚雷」の基地にもなっていました。沖繩や鹿児島に派遣され、いくつかは出撃したと聞いています。

まちが消えた

8月6日、わたしは所用のため市内に出てきていました。午前8時15分、紫色の火柱がぱつと立ち、すさまじい音、そして爆風…。

幸いわたしのいた所は建物の影になっていたので、けがはありませんでした。何が起こったのかわからないまま「ただごとではない」と、すぐさま部隊に帰ったのです。高台にあった本部からは市内が見渡せました。何も無い、燃えているだけの広島が…。

失われた多くの命

昼前には、原爆によりほぼ全滅した第二総軍に代わり、砲部隊が船やトラックで負傷者の収容を開始しました。助かりそうな人だけをどんどんトラックに乗せて。もう助かりそうにない人は連れて帰ることはできませんでした。そし



平和が続くように

1歳引き下がった昭和19年、19歳になったわたしは12月1日、松江の部隊に入隊しました。当時は「やってやるぞ」と思っていました。人も国もみんながそんな体制でしたから。関東軍要員として満州に渡り、主に軍の内務的な仕事をしました。本土決戦に備えて現在の韓国の泗川飛行場に移動して終戦を迎え、なんとか復員することができました。

後から聞くと昭和20年6月に川西航空機は姫路で初めての空襲を受け、工場は壊滅、大勢の人が亡くなりました。わたしも工場に残っていたら、死んでいたかもしれ

て、けがをした人を優先し、その日は夜通し縫合手術をしました。やけどは手がつけれません。ほろほろに溶けてしまつて、洗面器にやけどの薬を溶かして塗ってあげることしかできませんでした。

翌朝早く、診療所を用意したのでそこで治療にあたるよう命令があり、船で広島湾から中心部まで上っていききました。ちょうど引き潮で死体がどんどん流されてくるのです。岸にはたくさん死体。それらをかき分けるように船は進んでいきました。市内はまだ燃えているし、ひどいやけどを負っている人も歩いて見えます。その光景は今思い出してもぞっとします。

被爆、そして…

わたしはあれからずっと被爆者の会などで被爆された人のお世話を続けています。津山市には当初300人の被爆者がいましたが、毎年5人ずつほど亡くなり、現在は50人。そのすべての人が入院や通院をしながら、病と闘っています。

診療所といっても学校の運動場に畳表で囲っただけのもの。運ばれてきた人の名前を確認して、分からなければ着物などの特徴を書いて、家族が探しに来たとき、

